

モモのところへ行っごらん！

心理学講師 佐方 哲彦

私の好きなもののひとつに Märchen があります。決して綴りの d と r を間違えたわけではありません。メルヒェン、すなわち童話やおとぎ話の類いを読むのが好きなのです。メルヒェンには、幻想的なストーリーの中に人間の内的世界のリアリティが象徴的に語られており、深く豊かな心の旅に誘ってくれるので、人間の心を学ぶ私たちにとっては、専門書と同じくらいの価値はあると思っています。

「モモのところへ行っごらん！」

これは、ミヒヤエル・エンデのメルヒェン・ロマン『モモ』の中に出てくる言葉です。『モモ』は、「時間どろぼうと、ぬすまれた時間を人間にとりかえしてくれた女の子のふしぎな物語」というサブタイトルがついているように、人間の心の中で刻まれている人間らしく生きるための時間を盗もうとする灰色の男たちと、時間のほんとうの意味に気づいた小さなモモという女の子との戦いを描いたメルヒェンです。

主人公のモモは、少しばかり奇妙な格好をした何の変哲もない浮浪児です。モモにできたのは、人の話に耳を傾け、一生懸命に聞こうとすることによって、話し相手にほんとうの自分と出合わせ、自分自身を取り戻させることでした。それは、自分の時間を管理されていないから、自分の心に刻まれる時間を大事にするから、できることなのです。

私たちは、よりよい暮らしをするための時間的なゆとりをもとうとして、できるかぎり時間を儉約しようと考えます。しかし、実際には時間を儉約すればするほど、かえって時間をもったいながら、「時間がない」「ひまがない」と時間に追われ、ゆとりのないあくせくした生活、ぎすぎすした日々を送ってしまっています。では、儉約して余ったはずの時間、本来ならばゆとりをもたらずはずの時間はいったいどこへ行ってしまったのか。結局、ケチったのは人間らしく生きる時間であり、ほんとうの自分を見つめるための大切な時間ではなかったのか。『モモ』は、私たちにそう問いかけます。

もし、ほんとうの自分を見失ったとき、ゆとりのない暮らしに疲れたとき、「モモのところへ行っごらん！」といえるような相手をもちたいものです。君たちにとっての進学課程の2年間で、そんなモモに出会い、ほんとうの自分に出会える2年間であればいいなと願っています。